

横光利一「秘色」論

——作品の人物と伊勢詣の舞台設定を視座として——

鳥居千恵

序論

横光利一（一八九八—一九四七）の小説「秘色」^{ひそく}は、昭和一五年（一九四〇）一月一日、『中央公論』の第五五年新年特大号に発表された作品である。「編集後記」には「新春創作欄は御覧のやうに立派なものである。（略）横光、川端、中野、高見の四氏の短篇は何といつても今日の最高水準であらう。」とある。

横光は「秘色」発表の前年、昭和一四年二月一五日に、横光門下の二人の作家に新作の発表を告げる書簡を送っている。それは一見ありふれた書簡のように見えるが、実はそうとは言い切れない横光独特の暗示的とも含みとも取れる手

法^①が用いられており、わずか数行の書簡が、その作品を語る上で証言者としての役割をも担うのである。

横光は中里恒子宛書簡（昭和一四年二月一五日消印^②）で、先日は鯨下され有り難く御礼申上ます。新年号やつと仕上げましたが、風寒くどこへも出られません。中央公論のはたつた一八枚より出来ませず、まアまアといふ所にて出してしまひ今日一日のんびりとしています。

お風邪ひかれませぬやう。

と書いており、中里から贈られた鯨の御礼に添えて作家活動の近況を告げている。そこには「新年号」「中央公論」「一八枚」とあることから、新作の小説「秘色」について述べていることがわかる。書簡の冒頭に「鯨下され」とあるが、中里が神奈川県逗子に住んでいたこともあって横光に贈ったもの

であろう。小説「秘色」では、鳥羽の海で青磁色の水面と鯉が最後の場面を飾っているのが、横光は新作の「秘色」を読んだ中里が鯉の存在に気付いて、鯉のモチーフ化と素材のリアリズムに心を動かされる、そうなるであろうことを意識下においた横光独特の暗示的とも含みとも取れる書簡ではなからうか。さらに「新年号やつと仕上げました」とあり、そのことは本稿で述べるところの「秘色」執筆に至る経緯をたどる上での証言となる。

また、藤澤桓夫宛書簡（昭和一四年二月一五日消印）³で、手紙かいたまま新年号に追はれ、いきが脱けてしまひましたので、遅れたおわびまでいたします。胃がこのごろ悪くなつていろいろ工夫いたし胃を騙す方法を考へてゐましたところ少しばかりよくなつて来ました。自分の頭もかうして騙すに限るとはたと手を打つた次第、新年号を見て下さい。

君も一つ大いに自分を騙す工夫にも少し専念されたし、馬ぢや金を騙すだけなり。馬に扁くとは人に扁く意に非ず、これ如何にぞや。

と書いており、「新年号」とあることから、藤澤に『中央公論』新年特大号の小説「秘色」を見るように、と伝えている。

「自分の頭もかうして騙すに限るとは、たと、手を打つた」とあるように、作品の執筆に専念することが胃の痛みという感覚をやわらげ、頭を騙す方法となることを述べており、それほどこに「秘色」は、執筆に集中した作品であることを言わんとしているであろう。そのことに補足するかの如く「君も一つ大いに自分を騙す工夫にも少し専念されたし、馬ぢや金を騙すだけなり。馬に扁くとは人に扁く意に非ず」とあるが、藤澤は「自分でも馬を持つくらいに競馬に凝っていて、淀や阪神の競馬の開催日には欠かさず出掛け」⁴、「競馬は青空の下で金を棄てる気晴らしの遊びと割り切っている」⁵ほどであった。後に横光は住吉の藤澤宅を突然訪ね、彼が京都競馬へ出かけて不在で会えなかつた時のことを、藤澤桓夫宛書簡（昭和一五年四月三〇日消印）で、「大きな荷物さげ、淀の競馬にも行けないし、あの日は人生の晩年みたいな日でした」⁶と書いていることから横光の落胆ぶりが見て取れる。これらことから藤澤の競馬観戦と金銭感覚に対しての教訓的な書簡であると同時に、藤澤に馬好きでもあつた菊池寛との交流を勧めながらも、作家としての彼の才能を見込んで、もう少し執筆に専念するよう諭している横光独特の含みのある書簡と考えられよう。また、そこでは文学の師として門人进行、

律義にして真面目な横光利一の姿を、現在に伝えていると言えるのである。

小説「秘色」が発表された六ヶ月後の昭和十五年（一九四〇）七月五日、作品集『秘色』^{〔資料1〕}は新聲閣から刊行されている。その作品構成は、「秘色」と「秋」の小説二編、「覚書」「希望について」「山の中」「梅雨」「羽田記」「新幽霊」「池谷君の死」の随筆七編に俳句三七首となっているが、横光は自ら装幀した作品集の表題名を小説「秘色」と同名の『秘色』とし、用紙のすべてに手漉和紙を用い、見返しの部分に独自の色彩を施している。そのように横光が「秘色」に重きを置いたのは一体なぜであろうか。

そこで本稿では、小説「秘色」に描かれる伊勢詣を舞台に、作中の主人公矢代老人の抱く人生の苦悩とその変貌のさまに着目し、さらには横光の故郷喪失感と作品の関係性、古典回帰、秘色いろの世界観、加うるに小説「秘色」執筆に至る経緯を取り上げ考察を進めたい。

（※小説は「秘色」、作品集は『秘色』としている。）

一 「秘色」に描かれる伊勢詣

横光は小説「秘色」を発表する三年前に伊勢詣をしており、昭和十二年二月二日に妻千代と伊勢神宮を参拝し、内宮で故郷東柘植（現三重県伊賀市野村）の消防団と出会っている。その消防団との偶然の出会いを東柘植小学校時代の幼友達・澤井善一宛書簡（昭和十三年一月二六日消印）^⑤で、次のように書いている。

暮れの二十日に参宮をして二十一日に山田へ着き、内宮を家内と一緒に這入って行きましたら、全く偶然、東柘植の字を背中に浮べた消防団と一緒に、非常に驚きました。誰も気がつかぬやうでしたが、私は社前で消防団に取り包まれたまま、団長の最敬礼の号令に従ひ、皆と一緒に拝殿に向かつて最敬礼をしました。近ごろこれ程嬉しく喜ばしく、爽々しい気持ちを感じたことはありませんでした。敬礼をすませてから誰か知った人はいないかと、あかず眺めてをりましたが、誰も皆、僕のゐたころは生れてもゐない人ばかりでしたので、そのまま黙って別れて来ました。家内にもこの一団の人々は僕の村

の人たちだと教へてやると、何だかどこか似てゐると云つて、非常に偶然にびつくりしてをりました。あの日行つた消防団の人々に訊ねてみて下さい。私の他に誰も参詣人がゐませんでしたから必ず覚えてゐてくれるにちがひないと思ひます。

私は大阪の講演がありましたので、時間もありません故、鳥羽へ出て、電車で大阪へ行きましたが、一寸柘植へ行つてみたいと思ひました。私は本籍は九州になつてゐますが、九州へは殆ど行つたこともありませんが、やはり故郷と云へば柘植より頭に浮んで来ません。

この横光夫婦の伊勢詣の体験を基として「秘色」は描かれ、東柘植の消防団との偶然の出会いを故郷の柘植からほど近い滋賀県油日の青年消防団と設定している。油日の青年消防団の地は、三重県と滋賀県を隔てる鈴鹿山脈最南端の山である油日岳の麓に位置し、緑豊かな油日岳を御神体とする山岳信仰が伝わる土地であることを横光は知っていたのであろう。その麓には油日神社があり、現在も消防団の参拝が途絶えていないのである。「秘色」の矢代夫婦が歩むのは伊勢神宮の外宮と内宮、二見ヶ浦、そして鳥羽である。「秘色」の伊勢詣は横光自身が歩んだ旅路であるとともに、横光の敬愛した

松尾芭蕉や西行が歩んだ旅路でもあることは興味深いことである。

「秘色」(『中央公論』) 発表から二ヶ月後の昭和一五年三月の『文芸春秋』に掲載された長編小説「旅愁」¹⁰ 第二篇第一一回に、

——いつかお報せしたかと思ひますが、お父さまも気がこのごろお弱くなりましたのか、お金貸しもあまりひどいことをなさらなくなりました。お伊勢参りをお母さんとなさつたとき、偶然に郷里の消防団と一緒に驚かされたことがあります。郷里へも先日初めて帰られ、御先祖のお墓参りをされました。

とある。ここでは、横光の伊勢詣の感動体験は(パリ滞在中の)青年矢代耕一郎のもとに届いた(日本で)病を患う矢代の妹幸子からの手紙という形式をとつて描かれている。

これらのことから昭和一二年一月二一日の妻千代との内宮参拝における故郷の消防団との偶然の出会い、横光にとつてへ故郷への思いを増幅させた驚きの出来事⁹であつたことがわかるのである。

横光の生まれは福島県北会津郡東山村大字湯本川向(現会

津若松市東山町湯本川向) 東山温泉であるが、父・梅次郎(一八六七—一九二二)は土木関係の請負業をしており、それに伴って横光も千葉、東京、山梨、三重、広島、滋賀などを転々としている。東柘植は母こぎく(一八七一—一九二五)の故郷であり、横光は小学校時代の一時期をそこで過ごしている。仕事の旅先で父は病となり、母も急な病で入院したため、柘植で四歳上の姉しずことともに過ごした横光にとって、「半生のうち一番家計の苦しいとき」であったが、「叱られるもののない自由さで却っていつもより元気」な自分であったと述懐している。ところがその一方で、虐められた経験を「東京から変つて来た少年だつたから学童たちから虐められ、その度びに反抗して気持ちが悪く」なつたとし、柘植では、そのような辛い経験もしている。しばらくして、姉は母の看病のため、横光は吉祥寺(滋賀県蒲生郡竜王町の親戚の寺)に預けられるなど、子ども心に孤独な生活を余儀なくされている。横光はそのようななかで故郷喪失感といった苦澁を味わっていたのである。したがって、小学校時代の横光には澤井善一宛書簡で「やはり故郷と云へば柘植より頭に浮かんで来ません。」とした懐かしい故郷としての柘植はまだ心に根付いていなかったと言えるであろう。

「秘色」の主人公矢代老人は、料亭のコックから身を起して財を造り、それを基に高利貸を営み、東京市の市会議員を務めている。老人は妻柿乃を伴って伊勢詣に向かう汽車の中から雪を冠つている鈴鹿を見ると故郷の記憶が甦つた。老人は四〇年もの間故郷に帰っていない、それは子供のころ貧しかった為に、富み栄えた親戚から虐められた不快さが生涯とれなかつたからである。

しかし、眼に浮かぶ故郷の山や川の姿だけは年とともに懐かしく感じているのであり、辛く悲しい記憶がある為に、帰りたくとも帰ることのできない懐かしくもどかしい、そのような故郷¹³が存在したのである。妻柿乃は上州の生まれであり、老人の好まぬ故郷へ行くことにさしての興味もなかった。老人の伊勢詣は故郷の匂いに近づく喜びもあるとはいえ、「娘の病ひの長びいてゐる苦しさを静めたい気持ちに籠めての旅」であり、「子供から事あるごとに、もう金貸業だけはやめてもらひたいと頼まれる苦情」に堪へかねて訪れたのであった。老人が営む高利貸の遣口は人とは少し違っており、本来は相手に借用証を書かせる場面で相手の「不払ひの場合を想像して、自分の資産を相手に預ける形式とし預かり証と書かし」ている。それは「満期に返済の出来ぬときは

相手が横領罪になるといふ辛辣きわる方法」であった。また老人は柿乃と結婚をする際に、柿乃の返戻金が老人の渡し

た結納金の半分だったという理由で柿乃に不信感を持ち「三年間も夫婦の行ひをしなかつた」。そういった高利貸の遺口と返戻金に対する思いからは、老人の金に対する執着心が見え隠れする。そのような老人であっても、後に返戻金は地方の習慣とわかり、老人が「柿乃の前に両手をつけてひた謝りに謝つ」てからは「柿乃を愛すること他人目も恥じとせぬほどに変わり、柿乃以外の女を近づけたこともかつてなかつた」のである。あからさまな本心の吐露に続いて、老人の面目も恥とせぬほどに変わった妻柿乃への接し方、このような極端過ぎるほどの老人の変容は、不快さの氷解した後の老人の姿、つまり生来の老人の心根の素直さが表出したものであり、本来の老人は天真な純朴さに充ちている、横光はそのように読者に印象づけようとしたのであろう。

矢代老人も、寄る年波であろうか、詐欺に引つ掛かるなど「昨日の炯眼も日日衰へを見せ」始め、「海岸の別荘に療養させてある娘の子の病ひも手をつくす甲斐が顕れず、何となく宗教心のとみに加はつて来たかのやうな潤みの増した風貌」となっていく。

このように用意周到な状況設定のなかで、矢代夫婦の伊勢詣が用意されていたのである。

伊勢・山田の駅（宇治山田駅）から自動車の参拝コースで、まず外宮を訪れた矢代夫婦は、境内の玉砂利や太い杉の幹、そして水を打ったように濡れている森や塵ひとつない様子に有り難さを感じている。そのようななかで老人は伊勢「神宮に関する知識は何もない自分を知り、ただ樹の美しさ苔の見事さを見廻すばかり」で、池に浮かんでいる家鴨の群の中の鴛鴦を見て、自分たちの老齡を思い出すなどしている。「拝殿の前まで来たとき老人は脱ぎ捨てたトンビを砂利の上へぐかに置き、両膝を折って地の上へ座」り、「頭を石に擦りつけるやうに長長と礼拝してから」太い立派な木や千木を仰ぎ、また礼拝している。その「あまりに激しいひた向きな老人」の礼拝の姿は、「私は正しさを実行いたしたのでございます、お咎め下さいますな、お咎め下さいますな、と云ひつづけてゐるやうに見えた」のであり、柿乃も老人の横に同じように座つてうやうやくと拝んでいる。その時「膝から石の冷えのほつて来るのも罪の深さの吸ひ取られてゆくやうな快感に」感じ取った老人は、外宮の「樹の美しさ苔の見事さ」「あたりの荘厳さ」に圧倒され、これまで長年成してき

た高利貸の行為を正義とすることの不条理さと、その行為に対して罪の意識を感じ始めている様子が見受けられるのである。

後に述べるが、外宮での老人のような礼拝の姿は、横光が強い関心を抱いていた芭蕉の俳文に見られる。興味深いことに、横光の「母は三重県阿山郡東栢植村大字野村（現伊賀町栢植町野村）の出身で中田小平、きくの四女。きくの実家は松尾家」¹⁷であり、「こきくは信心深く律儀で、利一はこの母から茶を習い、芭蕉の話を知り」¹⁸ている。そのことに關して、中山義秀は、

松尾芭蕉の系をつぐ母方の血をほこりとして、ひそかに芭蕉の風をまなんでいるようなところがあった。彼が俳句をやりだし南画の稽古をはじめたりしたのも、芭蕉の血を意識していたからに相違いない。¹⁹

としており、さらに三重県立第三中学校時代の一級先輩にあたる由良哲次は横光のことを「松尾芭蕉の濃き血統を母より受けてゐる」²⁰としている。²¹

芭蕉について、横光は講演「事変と私等」（昭和一六年二月）で、

芭蕉は俳人として大層偉い人で日本で最も偉い人の一人

ではないかと私は思ふ。外国人まで感服させてゐるのは芭蕉で、フランスでは大変なものであります。²²

と述べており、「わが郷土讚」（昭和一八年一〇月）では芭蕉の人となり「無欲清澄な風雅精神」²³の人と賞賛している。

芭蕉は貞亨五年に生まれ故郷の伊賀で越年して後、二月四日に伊勢を参宮し、同一七日まで滞在している。その時の芭蕉の俳文には、

貞亨五とせ如月の末、伊勢に詣づ。此御前のつちを踏事、今五度に及び侍りぬ。更にとしのひとつも老行まゝに、かしこきおほんひかりもたふとさも、猶思ひまされる心地して、彼西行の「かたじけなさに」とよみけん涙の跡もなつかしければ、扇うちしき、砂にかしらかたぶけながら、

武陵
芭蕉桃青
拜

何の木の花とはしらず匂ひ哉

とある。西行が詠んだ「何事のおはしますをば知らねどもかたじけなさに涙こぼるる」（『西行法師家集』）の心情を懐かしく思い、芭蕉もまた同じように扇を地に置き、土下座して

砂に額をつけ、爽々しさを感じながら拝しているのである。

横光夫妻が伊勢詣をした昭和一二二年当時、「秘色」の矢代老人のように体つくばって礼拝する姿が普通の光景であった。

作中では、外宮の莊嚴さに心を打たれ、自然と神妙な面持ちで拝する矢代老人の姿が「何事のおはしますをば知らねども云々」の西行や「何の木の花とはしらず云々」の芭蕉の姿を彷彿とさせるのである。

横光は澤井善一宛書簡（昭和一八年二月三日消印）に、

芭蕉翁が奥州を廻られた年、私は外国を廻って来ました
が、こんなことは何んでもないことはいへ、蕉翁の御
苦勞のほど、よくよく身にしみます。また柘植へ蕉翁の
帰られないことも、よく頷かれるところがあります。こ
れは皆さん御存知ないことです。好きなればこそ帰れな
い、といふ苦しさ。これは文人ならではの分らぬことです。

と書いている。横光の文人としての意識のなかには、常に母から聞かされていた芭蕉の存在があった。そのことから横光は伊勢詣の折に芭蕉の歩んだ旅路を意識しつつ、「秘色」では神妙な面持ちで礼拝する老人を描いたであろうことが考えられるのである。

外宮を後にして内宮を訪れた矢代夫婦は、丸木の大きな鳥

居を潜った。年の暮れということもあり、参詣人が一人もない整った広い境内を歩くなかで老人は「一層爽やかな夫婦の有り難さ」を感じており、「外宮の厳しさとは違ひ何となく豊かに延びやかな心地がして、これこそ人間の罪の心もお咎めもないやうな自然なみ景色だ」と思い「ほくほくと嬉しさうな笑顔」を見せる。そのとき地方から来た二三十人ほどの青年消防団が追い越して行ったので、夫婦は後を追うように杉の森へ入った。その森は「杉の太さも外宮よりは一層見美」であり「日の眼も射さぬ叢がり繁つた葉の中を突き抜けて天に延びる幹の行方を見仰いでも、もう梢さへ見られなかつた」ほどである。先には五十鈴川があり、そこで矢代夫婦は青年消防団に混ざって手を清めた。五十鈴川での御手洗を終えた老人は、

手を拭きつつ石の上に立つて川上の方を眺めた。沢山な石を含めた流れが日光に半面を照らし、霞のやうに奥へ拡がった森の裾から傾きうねって流れてゐた。幾条もの泡立つ瀬が盛り下がって来て静に入り込んだ所が老人の足の下だったが、川底の石の数まで澄み透つて見える清らかさに老人はひよこりとお辞儀をした。

そして矢代夫婦が五十鈴川の傍から引き返そうとしたとき、

老人は青年消防団の一行の紺の法被の背中に、懐しい故郷の「油日」と書かれた文字を見つけて、棒立ちとなったまま赤面し、眼を爛爛と輝かせながら故郷油日の文字を見詰めている。「この突然に降り下つて来たかと思へるばかりの偶然の出来事には、老人も今は神のみ業とより思へなかつた」のであり「松の幹のますます太く密集して来る重厚な森」を形成する伊勢神宮の豊かな自然の中で「無上の幸福」を感じているのである。老人は油日の青年たちの顔を前方から一人ずつ穴のあくほど眺め、見終わつてから「子供のころ自分の遊び懐しんだ同じ山川の髪の中で、いま毎日寝起きしてゐるものがこの子らかと思ふと、その消防服まで自分の子供のころの寝衣の匂ひのやうに感じられた」のである。しかし「郷里を捨てる決心を實行してしまつた今では郷里の方が許すまい」とした思ひに加え、人さまから高利をむさぼる商売をしているという不名誉な思ひなどから青年たちの前に名乗り出ることをさえてきなかつたのである。それでも老人は消防団の後から離れないやうにと、歩みを速めつつも最後に故郷へ帰つた時の父の死に際の最期の言葉を思ひ出している。

「それでは安心なさつて成仏なされや。」

と矢代老人が耳もとで云ふと、父は眼をかつと大きく開

け、

「生意気ぬかすな。お前が成仏出来ぬ奴ぢやぞ。」

と怒鳴りつけて息が絶えた。

他人にはまだ一度も言つたことのない、その記憶は故郷の青年たちを前にしたこの時ほど「痛く胸を突き刺して来ることはなかつた」のである。さらに、

どうして自分が悪事をしたことが一度でもあつたらうか。働いて金を儲け、それを頼まれて貸すどが悪いか、——とこのやうに思ひ考へても、何となく悪事らしい臭ひのとれぬのは、森森と直立してゐる杉の端正さに包まれた、身の汚れのためばかりではないらしかつた。

矢代老人も否定しきれない何となく悪事らしい臭い、それが高利貸の職業的罪悪感そのものの正体であつたのである。その予期せぬことに戸惑いを見せて「訳のわからぬことに出会つた気持ち」となる老人であつた。そして、いつの間にか「深山の静けさの中に閉つた門扉と一本の注連飾しめかざりの下つてゐる簡素な杉の幹が見えるだけ」の拝殿の前まで来ていたのである。拝殿の前は狭く、自然に塊りよつた故郷の青年消防団の「隊伍の中に巻き包まれた形になつた」老人は、肩口へ迫り寄つて来る消防服の紺の匂ひに「胸がときめいて来るのを

覚え」たのである。作中で二度描かれる懐しい匂いは、老人の意識を懐かしい故郷へと誘うのであった。

横光は昭和一六年四月に伊賀へ帰郷し、阿山高等女学校で「事変と私等」（前出）と題した講演を行い、

丁度加太のトンネルをぬけると、もう胸がわくわくして来て何とも云へない感じが致し川をみても山をみても小さい時の事が思ひ出されて何だか幼い時寝てゐた寢床を見る様で山の襞一つも忘れてをりません。山々の襞から母や姉の乳のほひがする様に感じられました。⁽²⁸⁾

と述べている。このことから、矢代老人の「胸がときめいて来るのを覚え」た匂いは、横光の幼いころに故郷で過ごした母や姉との温もりのある生活を思わせるものであったと言えよう。阿山高等女学校での講演が故郷訪問のきっかけになったとはいえ、長い年月帰っていなかった故郷伊賀へと横光の足を運ばせる原動力となったのは、妻千代との内宮参拝における懐かしい故郷の消防団との偶然の出会いと、そこでの感動体験が横光の故郷喪失感を和らげたことによるものである。

矢代老人と青年消防団との内宮での偶然の出会い、そこに語られる拝殿前での驚きの出来事が、「胸にわだかまつてあ

た心の曇り」を一時に取り去り、「何とも云えぬ良い心持ち」となった老人は「『わしは皆と一緒に拝んだよ。お前見てたかね。』と嬉しそうに、「一生の希望を達したかのやうな満面の笑顔で」妻柿乃に接するのであった。「あなたまアお若い方になつて。」柿乃も「まったく新しい良人を見るやうに老人を見上げて嬉しさうな」表情を見せている。そこには、優しい眼差しで矢代老人を見守る柿乃の良妻振りが見て取れるのである。一方の矢代老人は妻の結納金返戻金事件の解決以来、妻柿乃を誰憚ることもなく実直に愛している。昔から伊勢詣に纏わる夫婦の別れの話在即座に否定しないで、妻柿乃に不安な影を抱かせるなど、少し剽軽な一面を見せることこそあったが、老人は内宮の神域を妻柿乃とただ二人きりで歩いて行くことに「一層爽やかな夫婦の有り難さ」を感じているのであった。

矢代夫婦は内宮をあとにして、夫婦岩を望む二見ヶ浦から鳥羽まで向かい海女業の見学を行う。老人は「神前で受けた感動がほど良く全身に廻つた浮き浮きとした明るさで絶えず上機嫌」であり、老人の喜ぶ様子に熱心に応じる海女の手が「青磁色の水面」から貝を捧げて見せる度に老人は洋傘を上げてはしゃいでいる。その青磁色の海は、岩の間で鯉の泳ぐ

のがよく見えるほどに澄み渡っていた。そして、そこを泳ぐ「鰈」に注視するなら実に興味深いことに気付くのである。それは古来から「鰈」には比目の魚、或いは比目魚ひりまぎよという異名があり、外宮で矢代夫婦が見た「家鴨の群の中の鴛鴦」のように夫婦の仲むつまじい例えとされていることである。

最後の場面では、伊勢詣に纏わる夫婦別れの話が聞かされた妻柿乃の不安な影を、老人が何も語らずとも消し去るかのようになり、さらには横光自らの夫婦円満の願いを託すかのように、青磁色の海を泳ぐ「鰈」の姿は描かれている。このように夫婦のありようを描いたのが「秘色」の骨子ではなからうか。

矢代老人は、胸にわだかまっていた心の曇りを晴らし、神前で受けた感動がほどよく全身に回った明るさのなか、一生の希望を達したかのような上機嫌で喜びに満ちた老人へと変貌を遂げたのである。

木枯や海女の足裏水底に

(横光利一作品集『秘色』「俳句冬の部」)

昭和十五年七月五日 新聲閣

二 横光の古典回帰と秘色いろの世界観

横光は新感覚の文体を生み出したように、常に新鮮さを求め新しいものに目を向けた作家であるが、作品集『秘色』の巻末に、

この春は岐阜浜松に降りて和歌の浦に出た。京都も西芳寺の苔の庭、龍安寺の石の庭などを見て帰った。このやうな庭を見ると和紙の書物も出したいと思ふ(略)このとき大悟法氏にたまたま和紙を自分にすすめられこの集を編む。

と記していることから、昭和十五年の春の旅32で古都の歴史と文化に育まれた日本の美意識に触れたことよって、横光の日本の美しさに惹かれる繊細な心が一気に高まりを見せたのではなからうか。そこには昭和十五年という時代がありながらも、手漉和紙の書物を出したいと願うへ横光の古典回帰の心33を見ることができらるであろう。

横光と親交のあった川端康成(『正月三ヶ日』昭和十五年一月)と高浜虚子(『霜蟹』昭和十七年二月)は、作品集『秘色』刊行に次いで、同じ新聲閣から手漉和紙の作品集を

刊行しており、それらは横光の古典回帰の影響を受けたとも考えられよう。

作品集『秘色』の巻末に、収録作品については「別に意のある訳ではなく雑記より散逸したものを拾つたばかりである。」と記しているが、小説「秘色」に描かれる「白い足の裏に踏みついた海苔を付けたまま海の底に入る海女」の場面と俳句集に詠まれる「海女の足裏水底に」（前出）の情景は一致しているなど、収録作品の構成段階で相当に考えを巡らせて編集した作品集であると思われる。

函の帯には発行者である大悟法利雄³²が「第一出版に際して」と題し、「書籍はその内容が儼れたものたるべきは勿論であるが、それと同時に校正、印刷、用紙、装幀、製本、其他あらゆる点に細心の注意の払はれたものでなくては真によき出版とは言ひ得ない。最近のあまりにも粗雑な書籍の氾濫を慨く」と書いて、当時の緊迫した出版事情を伝えている。作品集『秘色』収録の小説「秘色」本文に入る一頁前には、辞書『大言海』からの引用文が記されている。

ひーそく（名）一秘色一〔初、支那、越ノ国ニ産ズ、錢氏、国ヲ御スル時ニ焼進ス、民庶用キルコト得ズ、故ニ秘色ノ名アリト云フ〕（一）青磁ノ磁器ノ名。飯ナド盛

ルモノト云フ。（中略）（二）ひそくいろ（秘色色）ノ略。衣ノ染色ノ名。瑠璃色ナリト云フ。雅亮装束抄、三「カラアヤ、

云云、ひそく、シロアヤ」

引用文の「ひそくいろ」に注目すると「瑠璃色ナリ」とある。作品集『秘色』の見返し部分は、深みのある紺碧をベースに、手漉和紙の繊細かつ混じり気のある風合いをもつ。そこには装幀者である横光独自の色彩表現が成されているのである。『大言海』で「瑠璃」を引くと「色ノ名。紺ノ明ルキモノ。紺碧。」とある。「秘色」の価値を生み出しているのは、このような特有の色彩観にあると言えよう。

また、横光の好んだ秘色青磁は最高級の品であった。中国の唐王朝の頃に宮中で使用され、臣下や庶民の使用が許されなかつた青磁である。わが国の古典文学には「台ニよろひ、秘色の杯ども云々³³」と「宇津保物語」にあり、「源氏物語」に「御台、秘色やうの唐土のなれど云々³⁴」とある他、「孟津抄」に「秘色今の茶碗也秘色は磁器也越州より奉る物也其色翠青にして殊にすぐれたり河に是を秘蔵して尋常に不用之故ニ号秘色云々³⁵」、「花鳥余情」に「李部王記天曆五年六月九日御膳沈香折敷四枚瓶用秘色云々³⁶」とあり「秘色の語」が見られる。昭和五六年、中国陕西省扶風県にある法門寺の塔

地宮から出土した一四点の越州窯青磁器（長頸瓶一点、碗七点、盤六点）は、同時に出土した『衣物帳』の記載により秘色青磁であることが明らかになったのである。秘色青磁は肉厚で、唐の詩文に「千峯翠色」とうたわれ、青みを帯びた淡い蓬色の色彩を放っている。

横光は、早稲田大学高等予科英文科に入学する前の五年間（明治四四年四月から大正五年三月）を三重県阿山郡東柘植村大字野村（現伊賀市野村）と三重県上野市（現伊賀市上野）で生活し、三重県立第三中学校（現三重県立上野高校）に通っている。第三中学校では、後の東京美術学校（現東京芸術大学）助教となる古美術に詳しい美術（図画）担当の戸部隆吉³⁹、藤堂藩の儒者の出で文章に厳しい国語・漢文担当の今井順吉⁴⁰、英語担当の島村嘉一⁴¹といった教師に恵まれた。このような伊賀での自由闊達な学生生活をもって、横光の根となる故郷誕生の黎明期にあたりと見て間違いはなからう。

横光は三重県立第三中学校時代に、紀行「第五学年修学旅行記」と文苑「夜の翅」を書いている。紀行に「…私は眼を醒ました、私の耳の曖昧を知つてゐる板一枚、それが怒鳴つて私を起こしたのだつた。波！波だ！其の船板一枚の耳の外に…」（第五学年修学旅行記）⁴²とあり、文苑には、「…喜をも

悲しみをも皆奪ひ取つた虚偽の夢は、柔和な仮面を脱ぎ捨て、嗤ひながら、屋根から、揺籃から闇と共に飛び去つて行く…」（夜の翅）とある。この二作品は旧制中学校時代の習作とはいえ、表現力の巧みさから横光の文才の片鱗を示す研究素材として有効かつ希少なものとなるう。

当時の横光の日記には、多くの挿絵が描かれており、教師の戸部から美術を教わるなかで、色彩感や焼物の醸し出す繊細な風合いといった芸術美の世界にまで関心を高めていったと考えられる。また伊賀には古美術商が多く存在し、店先にも多くの美術品が並べられていた。それらに魅せられた横光は、時代物の陶磁器などの色彩感覚を自然に学んだとしても不思議はなからう。

横光は美術評論家青山二郎の紹介で、昭和一六年一二月八日に開戦と大勝の記念として宋の陶磁器梅瓶⁴⁴を買っている。その梅瓶について白洲正子は「横光さんが美しい陶器に、はかない夢を託したことの切なさに想いを致すべきだろう」としている。横光は記念品として梅瓶を購入するほどに陶磁器の魅力に惹かれていたことがわかるのである。「秘色」以外に「宝」（大正九年一月）⁴⁶や「笑はれた子」（大正一一年五月）⁴⁷、「梅瓶」（昭和二一年四月）⁴⁸などの作品に見られるよう

に、横光は陶磁器を小説の素材や作品名として使用すること
を好んだのである。

横光は講演「事変と私等」(前出)で、

あの伊賀焼も大層有名で日本でも一番よいものとされて
ゐます。(略)伊賀焼が日本一だといふことも利休が云
つたのです。その当時そのやうな美を発見するといふこ
とは何万人に一人位しかなかつたのであります。¹⁸⁾

と述べている。横光が「もつとも日本で純粋な陶器¹⁹⁾」と評し
たのは、故郷の伊賀焼である。伊賀焼は中世六古窯の一つに
数えられ、桃山時代には茶の湯とのかかわりの中で豪壮な風
格を確立させた。伊賀焼の特徴であるきらめくような美しさ
を備え持つビードロ釉は淡い蓬色であり、秘色青磁と非常に
よく似た色彩を放っている。岸田國土をして「横光君は大分
で生れ、伊賀で育つた人と聞いてゐるが、いづれにせよ、故
郷を懐かしむ心を、彼ぐらゐ豊かにもつてゐる文学者を私は
多く知らぬ²⁰⁾」と言わしめたように、横光が「秘色」に深い関
心を寄せる理由には、故郷伊賀への思いがあつたろうことが
推測されるのである。このように「秘色いろの世界観」から
題名に込めた横光の思いを考察することは「秘色」という作
品を読み解く上で、重要な手がかりと成り得るのである。

昭和八年五月、ドイツの建築家ブルーノ・タウト(Bruno
Taut²¹⁾)はナチス政権を逃れて来日している。日本での見聞
をまとめた翻訳本『ニッポン』(昭和九年五月)によつて、
一躍タウトの名が国内に知れ渡ることとなった。『ニッポン』
に書いた桂離宮が好評を博し、京都の桂離宮に観覧者が押し
寄せるといった一大ブームまで引き起こしている。このよう
に日本建築や文化に関心の高かつたタウトは、昭和一四年六
月二八日刊行の『日本美の再発見』で「伊勢神宮の社殿とそ
の芸術性」などに触れて、

伊勢神宮に於ては、一切のものがそのまま芸術的であり、
殊更に技巧を凝らした箇所は一つもない。素木は清楚で
あり飽くまで淨滑である。見事な曲線をもつ萱葺屋根も、
——然し軒にも棟にも反りが附してない、——其底部に
於ける木材と石との接合も、共に清々しい。實際、構造
学的性格を表現するに役立たないやうな裝飾は何一つ施
してないのである。棟木の上に列ねた勝身木^{かつをぎ}の両端には
めてある金具は、萱葺と檜造りとによく調和してゐる。²²⁾
としてゐる。タウトの著作には、他に『日本文化私観』(昭
和一一年一〇月)、『Houses and People of Japan』(昭和一二
年)などが見られる。このような状況を背景に「秘色」執筆

に至る経緯をたどると、外国文学の紹介や翻訳文学が読者の関心を得ていたこともあって、タウトの翻訳本が横光の撰取の対象となり、タウトが述べるところの伊勢神宮や日本の美意識に強く刺激されたことが考えられるのである。横光は昭和二年一月の内宮での「嬉しく喜ばしく、爽爽しい」感動体験そのままに伊勢詣を新作小説の中心テーマと定め、昭和一四年二月には原稿を仕上げ、翌年の正月に『中央公論』の新年特大号で小説「秘色」を世に生み出したのである。このように横光は、タウトの翻訳本の撰取を経て、伊勢詣での体験から「秘色」の執筆、発表に至る二年余の空白に、はじめて幕を下ろし得ることが出来たのである。『中央公論』新年特大号の「創作欄」には、正宗白鳥「他所の恋」、川端康成「正月三ヶ日」、中野重治「留守」、高見順「心理的」、上野廣「ほんぶ日記」など、横光の「秘色」と合わせて小説六作品が掲載されている。当時の総合雑誌『中央公論』は『改造』とともに、その「創作欄」は最高の権威を持つものとされていた。したがって「秘色」は、生新さとエスプリを求めた横光の創作意欲の表れそのものであり、伊勢詣を舞台として、新たな実験が試みられた作品として捉えることができるであろう。また、「秘色」で直接語られることのない

たタウトの名は、後の「旅愁」で『伊勢でしたね。タウトを読んだせいか、内宮は立派だと思いました。』（『文学界』第六回 昭和一九年三月号）と登場人物・横三に語らせているのである。このように横光はタウトの影響のもと、小説の素材として伊勢神宮の社殿とその芸術性に強い関心を示しているのである。

「秘色」に語られる伊勢神宮内宮の宮域は、

五、五〇〇ヘクタールの広さで、大別して神域と宮域林とに分けて、さらに宮域林を第一宮域林、第二宮域林に分けている。神域とは、内宮のご正宮を中心とした付近およそ九三ヘクタールの地域で、ご鎮座以来まつたく斧を入れることのない禁伐林である。参道に立ち並ぶ榊杉は神域の森厳さを保ち、またモミ、マツ、ヒノキ、カシ、シイ、クス、サカキ、など繁り、暖帯北部の代表的な林相をなしている。⁵⁵

のであり、そこには太古のままの大自然が今も息づいているのである。ルイス・デイエス・デル・コラール (Luis Diez Del Corral)⁵⁶ は「日本の森は、とりわけ神社仏閣と常にともどもにある杉の森は、地中海や大西洋の樹木からなるわれわれヨーロッパの森に見出しうるものとは格段と優れて、自然

の息吹を呈している。(略) 日本の社殿自体が木でできてるのであって、それは常にその傍に構えて庇護と防衛にあたって森の直接の延長にほかならない」とし、「森厳極りない樹林にとりかこまれた伊勢神宮⁵⁶」としている。

矢代老人が歩んだ伊勢神宮を形成する森の木々は、今も海に向かって映える採光豊かな常緑樹であり、四季を通じて緑の再生を繰り返さず、それはまさに明澄なる自然と秘色いろの世界であり、その姿は生来の純朴さを取り戻したかのように変貌再生した矢代老人の晴れやかな姿とも重なるであろう。

結論

横光利一の文学作品を論じる手だてとして、作品論と作家論の融合が重要な課題となる。そこで本稿の「秘色」論では、横光の年譜調査と澤井善一宛書簡など、フィールドワークによる検証を試みた。またブルーノ・タウトの考察のなかで、「旅愁」の新聞掲載歴の錯綜状況に驚愕した、それは多くの論文に掲載日の誤りが指摘出来たからである。

中里恒子宛書簡に「蝶下され有り難く御礼申上ます」とあるように、横光の創作力によって贈答の蝶が比目の魚と化し

て「秘色」の最後を飾っていると考えられはしまいか。もしそうだとするならば、まさに蝶の変化^{変化}と言える。横光は門下の中里恒子に「秘色」という作品を通して、最高の返礼を示したこともなろう。

矢代老人の伊勢詣は、娘の病に対する苦痛、高利の金貸業に対する子供からの苦情、愛憎相半ばする故郷への思い、職業的罪悪感の内包といったさまざまな苦悩を抱いてのものであった。外宮での荘厳さに心を打たれ、内宮の豊かな自然のなかで五十鈴川の清らかさに触れ、さらには、故郷の青年消防団との偶然の出会いと、そこで待ち構えていた喜ばしい衝撃とも言える偶然の出来事とが相俟って、心に抱いていた苦悩が一時に飛び去った思いがした老人は憎しみと罪の意識から解放され、妻の目に「まつたくあたらしい良人」と映るほどに天真爛漫な姿へと変貌を遂げたのである。

矢代老人は変貌の過程において、外宮の荘厳さといった明瞭なるもの(外面)に圧倒される一方、内宮では我に帰るかの如く自らの内面と向き合っている。そこには、外宮Ⅱ「外面」論理、内宮Ⅱ「内面」論理という横光独自の概念⁵⁷に基づいた外宮と内宮の描き方を見ることができよう。

横光は、伊勢神宮を「旅愁」に書いたことにかつてしばし

ば批判されている。しかし、「秘色」で描かれる伊勢神宮の根底にあるものは国家安泰や精神主義といったものではなく、作中の主人公矢代老人がそうであったように、伊勢神宮を形成する自然に包まれた神域に触れ、過去のわだかまっていた心の曇りを洗い流す場としての伊勢神宮であり、物語の「舞台」として機能する伊勢詣であった。

横光は三重県立第三中学校時代、学校行事の一環として伊勢詣をして以来、訪れる機会のなかった内宮へ参拝したことをきっかけとして、横光自身も伊勢神宮という場に、嬉しく喜ばしく、爽々しい気持ちを感じたのである。そして、その横光が爽々しさの象徴としたのが「秘色」であろう。私は、明澄なる自然と秘色いろの世界に、心の清めや救いを求めた横光の一面を垣間見た思いがする。

「秘色」は、横光利一のそのような願いを結晶化した希有な作品として読まれるべきであろう。

(※「秘色」の本文は、昭和一五年(一九四〇)一月一日、『中央公論』第五五年新年特大号に拠った。但し、漢字の字体は、現在通行の字体に統一した。)

注

(1) 中山義秀は横光について「彼の作品を読んでもわかることだけれども、彼には十のものならその一、二を云って、後は含みにのこしておくようなところがある。即決、即断はやらな。そこがまた彼の人柄や作品の魅力であり、謎でもあった。」(中山義秀「台上の月」昭和三八年四月三〇日 新潮社 二二〇頁～二二二頁)

(2) この書簡は、石塚友二(俳人、小説家、編集者)によって写筆され、横光家に保存されていた。『定本横光利一全集』第十六卷(二一六頁)

中里恒子(一九〇九—一九八七)小説家。川崎高等女学校を卒業し、大正一五年に母方の縁者に当たる菅忠雄の紹介で永井龍男を知ったことをきっかけとして文学を志す。雑誌『山繭』(昭和三年一〇月)に「従兄弟同志」を載せたことで横光利一に師事。川端康成、堀辰雄の知遇を得た。昭和一四年、「乗合馬車」(昭和一三年九月一日「日光室」(昭和一三年一月)で第八回芥川賞受賞女性初)。

(3) 『横光利一全集』第十二卷(昭和三一年六月三〇日 河出書房 三四九頁)

藤澤恒夫(一九〇四—一九八九)小説家。旧制大阪高校在学中に、同人誌『辻馬車』(大正一四年五月)に発表の「首」が横光利一、川端康成らに推奨され新感覺派と目されたが、東京帝国大学文学部国文科在学中に「傷だらけの歌」(新潮)昭和五年一月)を発表し、プロレタリア文学に転向。その後も横光を師とする。祖父に儒者の藤澤南岳。

(4) 藤澤恒夫『大阪自叙伝』(昭和五六年三月一〇日 中央公論社 二二〇頁)
藤澤は、菊池寛と競馬の関係性に触れて、菊池「先生と私は

- どこかウマのあうところがあつたのだらう、先生は大阪へ来られる時には、必ずといってよいほど前もって私に手紙で予告され、先生の常宿だった島之内の松平旅館で将棋を指したり、先生の愛馬トキノチカラが関西の大レースに出走する日にはタクシーと一緒に京都競馬場や阪神競馬場へ出かけたこともあつた。」(藤澤桓夫「私の履歴書」昭和五八年一月二日 日本経済新聞社 五五八頁)としてゐる。また、藤澤は小田本作之助の競馬の師であつた。(『文学雑誌』一卷三三三号 昭和二年五月一日 参照)
- (5) 注4の書と同じ(二二六一頁)。
- (6) 注4の書と同じ(二二三三頁)。
- (7) 扉に「装幀 著者自装」「用紙(手漉和紙) 筑紫商会特製」とある。
- (8) 正式名称は「神宮」。三重県伊勢市の皇大神宮(内宮)と豊受大神宮(外宮)を中心に一二五の宮社。古来から神宮への参拝は、外宮、内宮の順に行うのがならわしであり、内宮と外宮は、五キロメートルほど離れている。(『日本国語大辞典(縮刷版)』第一巻 平成二年二月二〇日小学館、「お伊勢まいり」神宮司庁 平成一五年八月一日 伊勢神宮崇敬会 参照)
- (9) 黒ペン字、四〇〇字詰原稿用紙四枚、封書。澤井節子宅にて書簡に関する調査を行った。書簡は、現在も横光の母こぎくの実家のあつた伊賀市柘植町の澤井節子宅に保管されている。節子は、善一の子息善彦の妻。引用文は書簡に拠る。
- (10) 「旅愁」は、新聞連載小説として『大阪毎日新聞』(昭和二年四月一三日(一二日発行の夕刊))、『東京日日新聞』(昭和二年四月一四日(一三日発行の夕刊))から連載開始。また、『大阪毎日新聞』は昭和二年七月八日(七日発行の夕刊)の通算五四回、『東京日日新聞』は昭和二年八月六日(五日発行の夕刊)の通算六五回で終了。
- 「旅愁」の新聞掲載履歴については、相当数の先行研究に誤りが指摘できることから、現在も尚、掲載履歴は錯綜をくり返していると表現して間違ひはないであらう。
- (11) 横光利一「三つの記憶」(『文芸』新年号 第九卷第一号(小説特集) 昭和一六年一月一日 改造社 四頁)
- (12) 昭和二年の菊池寛の東京市会議員当選は、横光にとって印象的な出来事であつたに違ひなく、「秘色」の主人公・矢代老人の職業を「東京市の市会議員」と設定したことは興味深い。
- (13) 澤井善一宛書簡(昭和一八年一月三日消印)に「好きなればこそ帰れないといふ苦しさ。これは文人ならではの分からぬことです。」とある。黒ペン字、便箋一〇枚、封書。(以下、注9に同じ。)
- (14) 神社の棟木の上に、これと直角に並べた裝飾の木。中ぶくれの円筒形で鏝節の形に似ているところからいう。(『日本国語大辞典(縮刷版)』第二巻 平成二年二月二〇日 小学館 一三九四頁)
- 初出の『中央公論』第五五年新年特大号(昭和一五年一月一日 中央公論社)に「桂木」とある。作品集『秘色』では「桂木」を「かつを木」と書き換えていることから、横光は「かつを木」を「かつら木」と誤って書いたことが考えられる。ここでは「かつを木」とした。※()は筆者。
- (15) 日本建築で、大棟上に交差した木。本来は破風の上方が棟上に出て交差したものであるが、後には裝飾化し、棟上に置くようになった。(『日本国語大辞典(縮刷版)』第七巻 平成元年八月二〇日 小学館 三三三頁)

- (16) 「秘色」が発表された当時は、矢代夫婦のように地面に体づくばって礼拝するのが普通であり、現在のように立って礼拝するようになったのは昭和三〇年以降。神宮司庁 神宮文庫 主幹 文教部教学課長 吉川竜実に聞き取り調査。
- (17) 井上謙『横光利一』(新潮日本文学アルバム43 平成六年八月一〇日 新潮社 七頁)。同書中には「伊賀町柘植町野村」とあるが、当時は「伊賀町野村」。現在は伊賀市野村。
- (18) 注17に同じ(七頁)。
- (19) 注1の書に同じ(二三一頁)。
- (20) 二八九七―一九七九 哲学者。三重県立第三中学校で、横光の一級上。京都大学哲学科卒業、ハンブルク大学哲学科留学、帰国後、東京高等師範学校、日本大学教授。
- (21) 由良哲次『横光利一の芸術思想』(昭和十二年六月二〇日 沙羅書店 五頁)
- (22) 但し、その事実は確認されていない。(井上謙『評伝横光利一』昭和五〇年一〇月二五日 桜楓社 参照)
- (23) 横光利一「事変と私等」(三重県立阿山高等女学校同窓会『会報』第二十七号 昭和一六年二月二〇日 二〇頁)
- (24) 横光利一「わが郷土讃」(「三重の巻」『伊賀の国』(婦人公論 第二十八年第一〇号 昭和一八年一〇月一日 中央公論新社 四頁)
- (25) 桃亭秋屋編『花はさくら』(寛政一三年 六頁) ※句読点、濁点
は筆者。
- (26) 初出には「自然なみ景色」とあるが、『定本横光利一全集』第十巻に「自然なみな景色」とある。※「」は筆者。
- (27) 初出には「一層見美」とあるが、『定本横光利一全集』第十巻に「一層見事」とある。※ふりがなは筆者。
- (28) 注23に同じ(二八頁―二九頁)。父梅次郎は、加太トンネルの工事に携わる。その縁で横光の父母は結婚。
- (29) 比目ひめの魚うおと比目魚ひめくぎは同じ。ヒラメ・カレイの異名。二匹並んで泳ぐというところから、夫婦の仲むつまじい例え。
神宮司庁蔵版『古事類苑』(昭和四年八月三〇日復刻 古事類苑刊行会)、吉川圭三『廣文庫』動物部(昭和四年三月二五日 吉川弘館)、木村康一・鈴木真海 訳『新編国訳本草綱目』第十冊(昭和五年二月二三日 春陽堂)、『日本国語大辞典』(縮刷版) 第九卷(平成元年八月二〇日 小学館) など参照。
- (30) 伊藤整は「社会の秩序が動揺して革命的な思想が現れる時、文体の変化も急激に現われるのが常である。明治二十年前後、明治の末年には、思想の近代化とともに文体が写実的な口語体となった。大正末年から昭和の初年にかけて、マルクシズムが盛になった時、それまで落ちついていた口語文体は、ヨーロッパの第一次大戦の影響もあって、主として横光利一を中心として破壊され、新感覚派と言われる飛躍的な印象の結合による新文体を産んだ。それは、その時までの口語文体に含まれた論理に対する抵抗であった。」としている。(伊藤整『近代日本人の発想の諸形式』、『思想』 昭和二八年二月五日 岩波書店 一四七頁)
- (31) 昭和一五年五月から文芸協会主催、文芸春秋社、大阪毎日・東京日日新聞社後援の「文芸銃後運動」の講演旅行に同行。浜松、静岡、岐阜、名古屋、京都、大阪、神戸、和歌山の諸都市で講演。『岸田國士全集』二十八巻「年譜」 平成四年六月一七日 岩波書店 参照)
- (32) 二八九八―一九九〇) 歌人。若山牧水の高弟。
- (33) 中野幸一 校注・訳『編日本古典文学全集14うつほ物語(一)』(平成二年六月二〇日 小学館 一八四頁)
- (34) 阿部秋生・秋山虔・今井源衛・鈴木日出男 校注・訳『編日本

- 古典文学全集20 源氏物語(1) (平成六年三月一日 小学館 二九〇頁)
- (35) 野村精一「孟津抄」(『源氏物語古注集成』第四卷 昭和五年二月二八日 桜楓社 一六二頁)
- (36) 伊井春樹「花鳥餘情」(『源氏物語古注集成』第一卷 昭和五年四月二〇日 桜楓社 五八頁)
- (37) 「秘色の語」が見られる文献を挙げた。現在一般的に知られる秘色青磁とは断定できない、今後の検証が必要。
- (38) 長谷部楽爾『世界やきもの史』(平成七年五月一日 美術出版社 参照)
- (39) (生没年未詳) 東京美術学校(現東京芸術大学) 日本画科本科卒業。大正二年青森県立弘前中学校、三重県立第三中学校、横光所属の野球部顧問。後、東京美術学校助教授、仏教美術研究で活躍。
- (40) (生没年未詳) 藤堂藩の儒者の出。三重県師範学校卒業。三重県師範学校教諭、明治四〇年三重県立第二中学校教諭、大正元年三重県立第三中学校教諭。後、旅順高等女学校、旅順第一中学校校長を経て、昭和二四年三重県立上野高校講師。
- (41) (生年未詳) 一九四五 三重県立第四中学校卒業、明治四〇年早稲田大学英文科卒業。三重県立第三中学校教諭。島村抱月の門下として『早稲田文学』の中堅作家であった中村星湖と友人。大正六年七月『文章世界』掲載の横光利一「神馬」の選者は中村星湖。
- (42) 『公報』第一号(三重県立第三中学校校友会 大正五年三月一八日 四五頁)
- (43) 注42に同じ(二二頁)。
- (44) 昭和一六年二月八日付の「日記から」(初出未詳)に宋の梅瓶を買った事蹟をしたためている。横光の作品には小説
- 「梅瓶」(『人間』第一巻 第四号 昭和二年四月一日 鎌倉文庫)がある。
- (45) 白洲正子『いまなぜ青山二郎なのか』(平成三年七月二〇日新潮社 一三〇頁)
- (46) 作中に、次のような箇所がある。「五兵衛は本堂の床下へ帰り着くと、直ぐ柱の奥から小箱を持ち出した。そして、その中から色々な茶碗を一つ一つ取り出して、それを小箱の上へ三重つつ八山程に並べ上げた。彼は暫く袋の中の茶飲み茶碗を持つたまま並べた茶碗の山を眺めてゐて、それを一番中央の山の上へ置いた。が、今度はその横へ重ねた。併し、又直ぐその次へ重ね直した。そして再び最初の朝顔茶碗の腰の上へ朱色の唐獅子を倒さまに踊らせると、彼は茶碗の山に見入りながらちりちり荒筵をたくらして後へいざつた。そして、両肩をすぼめて『フフ』『フフ』と笑つた。「横光利一「宝」」
- 「サンエス」新年号 第二巻第一号 大正九年一月一日 サンエス本舗 一一頁)
- (47) 「吉は手工が甲だから信楽へお茶碗造りにやるといいのよ。」(横光利一「笑はれた子」『塔』第一輯 大正一二年五月一日 至誠堂 一一頁、原題は「面」)
- (48) 「白磁の大壺の胴が室内を和らげ、分擔した光沢の度合で、鉢や皿類が、昇つて来た人の脚音をそれぞれちつと聞くやうだつた。高麗の水差、鶏籠の蓋物、万歴の皿、粉挽の鉢、と、ここのはすべて、人が器物を觀賞するといふ配列ではなく、器物がその前に立つた人物の価値を見届けるといふ風だつた。」(略) 柿洪、李朝の秋草、越州、黒高麗、天龍の青磁、など、殊に一際目立つて華手な、女王の品位を放つ万歴の鉢があつた。その横にまた一層秀韻を湛えたたけ高い、すつきりとした宋の梅瓶が一つあつた。」(横光利一「梅瓶」(注44の

- 書に同じ、一〇頁。)
- (49) 注23に同じ (五〇頁〜五二頁)。
- (50) 注24に同じ。
- (51) 注31の書に同じ (三三五頁)。本籍は大分県宇佐郡長峰村大字赤尾 (現宇佐市大字赤尾)。父梅次郎の出身地。
- (52) (二八八〇—一九三八) ドイツの建築家。昭和八年に大モスクワ計画のためソ連を訪れた後、自国のナチス政権を逃れて昭和十一年一〇月まで日本滞在。トルコのイスタンブール芸術アカデミーに招聘され教授。昭和十三年過労で客死。日本入国時にビザ取得に尽力した建築家上野伊三郎 (一八九二—一九七二)、支援者に建築家久米権九郎 (二八九五—一九六五)、実業家井上房一郎 (二八九八—一九九三)、下村正太郎 (二八八三—一九九四) など。
- (53) ブルノ・タウト著 篠田英雄訳『日本の再発見—建築学的考察—』(昭和十四年六月二八日 岩波書店 一九頁)
- (54) 注8の書に同じ (八五頁)。
- (55) (二九一一—一九九八) スペインの歴史哲学者、文学者、文明評論家、美術史家、政治学者。代表作『ヨーロッパの略奪』(一九五四) は、三島由紀夫が激賞。一九六二年と一九六八年、スペイン政府の文化使節として来日し講演。
- (56) ルイス・デイェス・デル・コラル著 小島威彦訳『アジアの旅—風景と文化—』(昭和四十二年七月一〇日 未来社 一八頁〜一九頁)
- (57) 随筆「内面と外面について」(『文芸時代』第四卷第二号 昭和二年二月一日 金星堂、原題は「笑われた子と新感覚—内面と外面について—」)、講演「内面論理と外面論理」(『三田新聞』昭和十三年五月二五日 三田新聞学会)

(資料1)

横光利一「秘色」(作品集 初版本)

装幀

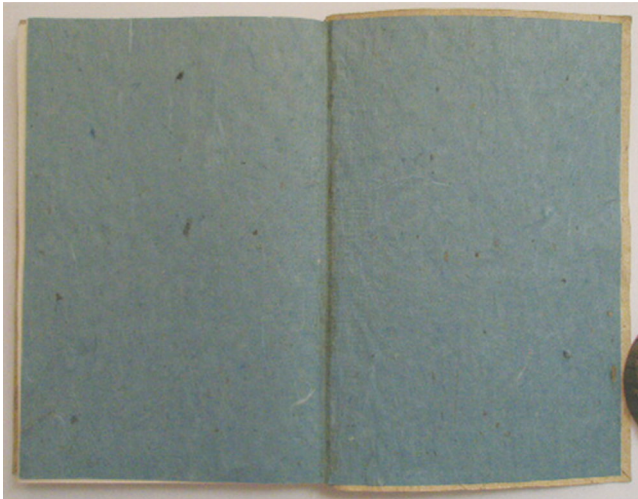
用紙手漉和紙

著者自装

筑紫商会特製



見返し部分(深みのある紺碧色で、手漉和紙の繊細かつ混しり気ある風合いをもつ)



本体	函	縦の寸法	横の寸法
一一・一センチ	一一・三センチ	一一・三センチ	一五・二センチ
一一・一センチ	一一・一センチ	一一・一センチ	一五・一センチ

【撮影筆者】

(資料2) 作品集『秘色』は、昭和一五年七月五日、新聲閣から刊行。収録作品一覧、雑誌・新聞・単行本名、発行年月日、目次・全頁数の一覧表を作成した。

【作成筆者】

収録作品一覧		雑誌・新聞・単行本	発行年月日	目次・頁	
小説	「秘色」	『中央公論』第五五年 新年特大号	昭和一五年一月一日	一頁	
	「秋」	『改造』第二一卷第一〇号	昭和一四年一〇月一日	二三頁	
	「覚書」	『文学界』第六卷第九号	昭和一四年九月一日	六七頁	
	「希望について」	『文芸』第八卷第一号	昭和一五年一月一日	八一頁	
	「山の中」	『東京日日新聞』	昭和一四年一〇月 六日、七日、八日	八五頁	
	「梅雨」	『大陸』第二卷第七号	昭和一四年七月一日	九三頁	
	「羽田記」	未詳	未詳	九七頁	
	「新幽霊」	『文芸』第七卷第七号	昭和一四年七月一日	一〇一頁	
	「池谷君の死」	「秘色」(新聲閣)	昭和一五年七月五日	一〇五頁	
	俳句				
	「春の部」(一〇首)		「秘色」(新聲閣)	昭和一五年七月五日	一一一頁
	「夏の部」(九首)				一一三頁
「秋の部」(九首)		一一五頁			
「冬の部」(九首)		一一七頁			
卷末記				一頁	
全119頁					

(とりい・ちえ 成城大学大学院博士課程後期)